

第3回「都立文化施設のあり方検討会」議事概要

1. 日 時：平成18年10月31日（火）午前10時から午前11時40分まで
2. 場 所：東京都庁第二本庁舎31階 特別会議室22
3. 出席者：福原委員（座長）
草加委員
小林委員
大沼委員（高野委員代理）
原委員
福地委員
浅津委員（吉住委員代理）
今村委員
杉谷委員
真室東京都美術館館長
4. 次 第
意見交換「テーマ：東京都美術館の現状と課題・役割・機能」
5. 主な発言
 - 東京都美術館東門前の一帯は現在、木が高く生い茂り暗いため、明るく歩きやすい環境にすべきだろう。
 - 環境対策として東京都美術館の屋根に太陽光発電を設置してはどうか。休憩室から見下ろせる屋上は緑として欲しいが、その他の屋根は太陽光発電パネルを設置し、施設周辺の夜間のライトアップに活用してはどうか。
 - 上野公園に立地する各施設の名称は全て堅い印象を与える。リニューアルに際して愛称などを考えて親しみやすさをもたせてはどうか。
 - 改修では、障害者・高齢者にやさしい美術館としてエレベーター、エスカレーターを設置し、彼らが優先的に利用できる配慮が必要だろう。また、女性来館者が多いことから、女子トイレを充実させる必要があるのではないか。
 - 設計当時よりも多くの入場者数を集めている。国立新美術館開館後、入場者が減少しても、当時より多くの入場者数を集めることが予想されていることから、入場者数に見合った施設設備の収容量を考慮すべきだろう。
 - 東京都美術館はレストランから森や緑が見えるレストランであるべきだろう。
 - 企画展共催展の開催に当たって、産学との連携があつて良いのではないか。また、大学との連携として、学生に一部企画をゆだねることがあつても良いのではないか。
 - 公募展の質を高めるために、第三者機関による審査によりコンペを実施したら良いのではないか。
 - 各施設間の連携を強め、文化施設群の総合力をもって、さらに「上野の森」を日本における最高の文化拠点とするよう努力していただきたい。公園整備についても最高レベルの文化拠点を創るという視点に立って精力的に取り組んでいただきたい。
 - レストランやカフェといったゆとりの施設を「上野の森」のあちらこちらに憩いの場として配置することが、この文化ゾーンの魅力アップにつながると考えられるので、是非整備計画の中で配慮していただきたい。
 - 機能的には東京都美術館の設立時の原点に戻り、新人発掘という役割をあらためて考えていただきたい。また、特に子ども達に対して、一流の文化芸術に触れる機会を提供できるような企画展示、あるいはワークショップなどの教育プログラムを是非とも推進していただきたい。

- 区立美術館との連携も進めて欲しい。
- 台東区内の東京都美術館を利用する団体からは、改修に際して、このような会場がないため、改修期間を短くして欲しいとの要望が大きい。展示搬出入については、搬入搬出の場所、スペースを十分に確保して欲しいとの要望も聞いている。
- 東京都美術館の事業の大部分は公募展への展示室貸出であることについて、これが公益事業であるか否かの疑問は残るが、経営の視点から考えると、将来も見据え収入源を確保する上でも、公募展受け入れなど展示室貸出に類する事業は一定程度必要だと考える。それらで収益を上げ、新規事業を開拓するよう提案したい。
- 東京都美術館はコレクションを持たず、学芸機能も不足しているとなると、アートセンター（あるいはクレストハレ）として存在することの意義が問われる。この現状を踏まえ美術館として存続させるためには、民間のイニシアティブの支援を新規事業として実施することが妥当ではないか。具体的には、学校や非営利団体とともに、教育目的、もしくは民間の活動を支援、育成する意味合いの企画展を共催したらどうか。
- これまで公共事業は行政や官がすべて担ってきたが、今後は、公共事業は必ずしもすべて行政や官が担うべきではなく、民も担うこととなるだろう。
- 本日の会議資料2には、新しさが提示されていない。民間との連携が望ましいと考えるが、そうであるとする基本理念にきちんと書き込むべきだろう。東京都美術館のリニューアルに際して、館長や学芸の役割をどう埋め込んでいくかが重要ではないか。基本理念、事業のあり方が非常にぼけてしまっていると、館が機能しなくなるのではないか。
- 上野公園が芸術文化の森として発展して欲しいと思うが、多くの人々が集まることで懸念されることがある。収益率を高めようと美術館も努力している。このことは収益面では良いのかもしれないが、来館者が多すぎるために美術と対面する空間でなくなりつつある。
- 民間活力を導入したアクティビティを繰り広げていくことが、新しい事業のあり方として良いのではないか。その点は容易に展開可能ではないか。民間にたくさんある能力を活かしていくべきではないか。それが公募棟を1棟あける部分に活かれば良いだろう。
- 閉館期間を短くしたいという実態的な要求はあるだろう。工事に着手するとしても、展示室の貸出予約が進んでいることから、今から2年以降となるだろう。そう考えても早々に方針を示すことは極めて重要となるだろう。
- 建替えと改修という選択肢の中で、建替えの場合、工期は2.5年となるが、どういう施設とするか、設計者の選定などでさらに長い期間が必要となる。緊急に対応するという意味では改修が好ましいだろう。
- 前川建築保存の必要性については、現在の建物が、当時の理想型ではなかったことを考慮すべき。すべてを残すべきと考えるのではなく、時代のニーズと課題に合わせて創造的に引き継いでいくことが重要ではないか。
- PFIか直営かの事業手法の選択は、案をつくるまでの期間を考慮して検討すべきだろう。PFI手法は、事業内容が明確になっていないと成立しない。都直営事業の事業範囲、民間事業者の事業範囲、どこからどこまでが事業者の自主事業かが明確にならないと執行できない。
- 東京都美術館は何を担っていくのか、それを明確に打ち出せば、より明瞭な理念になったのではないか。
- 重要な変更の方向性として、鑑賞支援とともに創造支援をしていくこと。美術館という場所が鑑賞の場だけでなく、創造の場であることを見直さなくてはならない。

- 鑑賞教室型から体験型へ、価値や発見を生み出すプログラムが必要となるだろう。その位置づけが明確になれば良いのだろう。
- 現在示されている改修プランは手直し程度にとどまっている。ホスピタリティの視点からは、さらに改修すべきことがかなりある。改修の場合は、ホスピタリティを上げて、マイナスの状態をゼロにもっていくことのみを目標とするのではなく、それを30年後、40年後にプラスにもっていくような、大きなビジョンが必要だ。
- 新しく東京都美術館がどうなるかということが決まったら、新しい検討会あるいは特定の方々に委嘱して、突っ込んだご議論をいただいて進めていくというやり方もあるのではないか。